

人云報

第 3 号
34. 3. 1

兵庫県兵庫郡山崎町
教育委員会内
尖稜郷土研究会
電話 二三番

本多忠可と心学(上)

島 田 清

山崎藩二百五十年の間で、名君と考えられる藩主が五人ある。一人は松井松平家の松平康映、一人は岡山藩池田家の分れである松平恒元、あと三人は郡山藩主(後、岡崎藩主)本多家の分家、本多忠英・忠可・忠隣である。このうち、最初の松平康映は在城十年に過ぎぬ短期間であったため、充分、その成果をあげるところへ行かなかつたが、次の松平恒元は、治城二十二年、城下をととのえ、士風を鼓舞し、民政の安定に努力するなど、注目せねばならぬ業績が少くなかつた。本多家となつてからの三人は、城地の石高が一万石に減り、財政規模が前二者より遙かに小さくなつた関係上、活動のスケールが前二者に及ばぬうらみはあるが平和で、文化の栄えた元禄時代・寛政時代、および天

保、弘化時代に出たこと、資質にすぐれ、施政に熱心であつたこととのために、それぞれかなりの業績をあげている。ただ、史料の保存が充分でなかつたり明治以後の研究者が多く出なかつたりして、それぞれ治績を克明にまとめるところへ行つていない点が惜しまれるところであつて、今後の努力が要請されるゆゑである。ここに述べようとする本多忠可は、そのうちでも特にすぐれた傑物であつて、本多家中興の英主と仰がれている人である。

二

忠可の父は、越前丸岡城五万石の城主である有馬純で、忠可はその三男として生れた。山崎藩本多家では、忠英の後、忠方・忠辰・忠堯とも壮年で病死し、後嗣がなかつたため、忠可を養子とし、あとを継がせた。安永・天明頃の『武鑑』に

帝鑑間詰、本多肥後守。

と書かれているのは、すなわち、この忠可のことで生れつきの明敏・果断と、正を愛し、悪を憎む剛直の性格とから、思い切つた藩政改革をおこなつてゐる。當時幕府では、田沼意次が政權を握り、放縦な政治をおこなつてゐた。心ある人たちは、これを改革しようとし、松平定信を老中首班に推してこれに当らせたのが有名な「寛政の改革」であつて、江戸時代二百五十

年の政治史上では重要な意義を持つてゐる。本多忠可は、早くから松平定信と親しく、これを取り巻くブレイン・トラストの一人として活躍していたことは、定信が自ら書いたものの中にも見えており、実業郷土史研究の上でも注目すべき事柄といえる。私は、こうしに意味から、忠可の事跡をもつと詳しく調査したいとかねてひら念願していたが、なかなか史料が見つからない。殊に、彼の思想的背景や、教養の根底を知る資料は少く、残念に思つていたが、中沢道二の書翰集を見てみると、少しばかり、それに関連するものが見出された。それで、次に紹介しておこうと思う。

三

中沢道二は、名を義通、通称を亀屋久兵衛と呼び、京都・上京区新町一条通りに生れた。父は織物を職業とする人であったが、道二は心学に心を寄せ、手島椿庵の門に入って性理の蘊奥をきわめ、三教一致の本義を会得した。それより、椿庵の命を受け、江戸に下つて心学の普及につとめた。

道二が江戸に出て、最初に寄寓したのは塩町炭屋の宅であつたが、毎夜、心学・道話をおこなつたため、聴衆が次第にふえ、更に、小川町の近藤に移つた。そして、寛政三年には遂に神田相生町に「参前舎」を建て、会日を定めて講義した。この時、門人の列につら

なり、指導を受けた人々に、旗本や諸侯が多くあつたことは注目に値することだ。松平定信のもとで台閣につらなつた本多忠可（陸奥・泉藩主）、松平信明（三河・吉田藩主）、をはじめ、本多忠英（播磨・山崎藩主）、分部光実（近江・大溝藩主）、堀直方（越後・村松藩主）、戸田忠伸（下野・足利藩主）、松平信道（信彰父子（丹波・龜山藩主）、保科正幸（上総・飯野藩主）、松平信愛（出羽・上山藩主）、堀直皓（信濃・須坂藩主）など、いずれも熱心な心学修行者であつた。天明元年四月十六日、中沢道二が布施松翁に宛てた手紙を見ると、忠可がどんなにこの修行を熱心にしたか、はつきり知ることが出来る。

一筆啓上仕候。先以、時分柄暖氣に相成候処、愈々御堅固にて有馬・大阪へ御出之様子、御苦勞千万奉存候。次に、私、無事に罷在候向、御心安く思召下さるべく候。江戸表、すみ屋御店源藏様、佐兵衛様、其外、尾張屋源六様、同弥三郎様、池田屋幸右衛門様、段々御世話被成、咄も繁昌仕候処、尾張屋源六様へ御出被成候本多肥後守様御そばづきの御医師山野直三様、私し咄し御間被成、肥後守様へ御咄被成候へば、早速、当月六日朝五ツ時、殿様のお便いとして、御用人名嶋庄太夫様御出被成、御深切なる御頼、段々辞退申せ共、無余儀御頼故、明る七日朝五ツ半時に参り、

殿様へ直きに御目見え仕、有難き御言葉に預り、殿様
 之御前にて咄し始り、御み寸の中には、奥方様、御そ
 ば付御女中、次の御み寸には御家中様方の御女中、殿
 様の次の向に、御家老、御用人名嶋庄太夫様を始め
 一家中様不残御詰被成、殿様を始め、一家中様方不残
 袴上下にて御詰被成、忍入たる殿様の御信心、殿様の
 御前にて、乍恐どん寸のふとんの上にあがり、四ツ時
 より九ツ時迄、高時絵の重箱の咄し仕、御馳走の御膳
 をいたゞき、暫く休息仕り、九ツ半時より、じやくし
 ぼさつ、すりこぎぼさつ、の咄し仕り、七ツ時咄しをお
 はり申候。

殿様一家中様方、大きに感心被成、夫より毎日参り
 十一日には植村嘉兵衛様の御供仕り、兩人参り、嘉兵
 衛様始て殿様へ御目見え被成、其日は兩人にて相勤申
 候。有難き事は、十二日夜の八ツ時に御発明被成、其
 夜は、私御屋敷にとまりし処、夜の明るを御待兼被成
 明六ツ時に御召被成、御答承り候処、甚希口宜しく、
 八ツの時計にて御発明被成、大に御悦不残、御家老様
 御始、御家中不残心学に御入被成、十五日は御用人名
 嶋庄太夫様、江戸詰の御役人頭岩崎又左衛門様御傍医
 師桑田道古様、御家中木村平吉様、同磯部磯之助様、
 同富沢文嘉様、御医師貞三様御内、右之御方々心学相
 濟、甚之御悦、始より次第に相濟申候。御家中是のみ

に御座候。御家老様始め、御家中様方御口を揃へ被仰
 候。殿様十五六才の御時より外の御なぐみ事御きらい
 被成、たゞ読物を御すき被、夫故、江戸中の音に聞へ
 る儒者方御召被成、又、名僧あれば御招待被成、自反
 の御講釈あり、かふしよなる事計承りしに、此度の
 やうなる有難き事は不承と被仰、殿様より下部に至る
 迄、行さわたり、難有存候との御悦、其上、有がたき
 事は、殿様御すみ被成候上にて、御礼申上と、恐多く

酒 清



本家門前屋
 吟 醸

も両手を御つき被成、何卒、国元の家老を始め、不残
 道にいたし。其以下の民百姓にも聞せし。何卒、
 勝手宜敷時、国許へ御預申と、殿様直の御預み、御国
 は播州明石より西へ十六里、難有事は筆に盡し難く、
 早々申上候。委事は上京の節、ゆるく奉申上候

四月十六日

かめ屋

道 二

松葉屋

伊右衛門様

一、手嶋先生へ宜敷御伝可被下候。其外、御連中様へも、返へす、宜しく御伝へ可被下候。

一、近江屋源右衛門様、御病氣の、次第に御ほんぶくのよし承り、大悦に奉存候。先生様宜しく御悦御伝可被下候。

河東の伝説

(二)

栗山 宗知

岸田部落のうちに、「みやこがなる」という地名のところがある。丁度現在神河中学校の真北に当る山の八合目あたりで、三段になった広い平地である。面積は、一町五反歩ほどはあるだろうか。昔はお寺やお宮があったところだと言ひ伝えられている。

この神社仏閣も、天正八年(一五八〇年)に長水城の落城と共に焼失してしまつたものらしく、今は空しく敷地の平担さが、ありし昔を想像させるだけである。このお宮の神体が現在の五十波の野口神社神体となつてゐるという。神体が野口神社に移動するとき、夜中に行列のけはいがあり、向の鈴音が神々しく

響いたと里人は伝えている。

この神体は、柳の木で彫んだ武者であるとも云われ、この柳の木は岸田の北隣りの野々上に柳の大木あり、この木を伐つて井上ほうがん某が製作したという。この柳の木があったところを未だに柳の田と称している。この故に野々上部落では、柳の下駄を履かず、なお焚物には一切柳の木をたかぬ慣習が昔からあるわけである。

明源寺

(1)

杉山 よしあき

遊鶴山明源寺は、兵栗郡山崎町山崎二八九番地にある。親鸞聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗本願寺派に属する小坊である。

伝によると、遊鶴山明源寺はもと、兵栗郡城下村金谷譲り尾にあつた。そうして長谷山遊鶴寺と称してゐた。何故、地名をユヅリオと言ふのかと言ふと、長水城の家老柴尾氏が城下村金屋に構を造つて居住してゐたのであるが、親世音菩薩を深く信仰してゐたので、白鳳時代の名作の親世音菩薩像四十八体を勧請し、安置するために柴尾氏は彼の所有している山を譲り渡して境内地として寄進したので、古来ユヅリオと言ふ。

尾は山の尾である。現在の金谷部落の西の山で竹やぶがあるところである。

天正八年（一五八〇年）、羽柴秀吉が長水城を攻略した時、この遊鶴寺外山崎町附近の十六ヶ寺を焼き捨てた。この時、長谷山遊鶴寺の住僧、天台沙門梅杖法師は、本尊を背負つて、大木だわを越えて、しばらく木谷部落（現在の教専寺のあるところ）にかくれ、後山崎の門前屋の屋敷内に小宇を建立していたが、山崎に藩政が置かれるようになってから、享保四年（一七一九年）に、現在の地に寺院を建立して、長谷山遊鶴寺を遊鶴山明源寺と改称し、今日に及んでいるのである。

大和の、長谷の観世音菩薩は、この時、他の僧が奉持して逃げて大和にたどりついて安置したものである。と「播磨鑑」に書いてある。

山崎に藩が置かれたのは、松平石見守（池田輝登のこと）の時代で、元和元年で長水城落城より三十六年後であり、この輝登の時、北魚町、富士野町、紺屋町、大雲寺町（現在の寺町）、竜町（元の茶町）、佐用町（現在の西新町）、門前町、高野町（福原町）が出未ている。明源寺は、西町より北魚町の西端の地に移転したのである。

片岡醇徳著の「兵庫郡誌」には、

一、明源寺 一向宗

本寺、当国龜山本徳寺、開基元和年中と言えり。さり下ら分明ならず。寺地表口六間、裏横六間半、堅十五間（畝敷三畝四歩）、外に表屋敷六間二尺に十四間公所。

住持。梅林 正林、貞存、林貞、義海、正哲とあり、この「兵庫郡誌」は昨年刊行された。栗山本の「兵庫郡誌」の、明源寺のところは次の通りの書き込みがある。（書き込んだのは醇徳先生でないことは明らかであるが、記者不詳ながら、興味もあり、信用してまいらうとおもわれる。）

私に又記す、當時は西新町に年未有りしが、僧二代果て無住の時、檀方中の願によつて、上ノ丁池の辺に弓屋敷とて小人の長屋あり、この池の東北の角に大きな杉ありて、その際に清水湧出の井もあり。

然るに願の通り御免故、享保四亥年三月初二日、一

文房具
紙類
教科書

本町通

志水成文堂

電 五四七

七一九年、右替地となつて、この弓屋敷に並び町屋敷に、八百屋庄兵衛と言う者の地有りしを寺へ買い取りぬとかや。今の寺これなり。

表口五間半裏同、竪二十間半、亥の十月に寺へ買い取り共に表口十六間半、裡横同、竪東の方にて二十二間四尺一寸五分、西の方二十間半、以上一反一畝二十六歩有るなり。……且又右明源寺の寺地この時より、北魚町に分地誌になり。……

この「兵衆郡誌」の、書き込みによつて、明源寺は享保四年までは、西新町の門前屋の屋敷内にあつたのを、その年、檀中の願によつて、弓屋敷と言う公地と八百屋庄兵衛の所有地を買収して移転し、北魚町に分地誌となつたことが明確に考察される。

兩山、梅杖法師は、慶安二年戊子に八十六才で入寂している。「兵衆郡誌」などに、梅林とあるのは、梅杖の誤りであろう。清水湧き出の井、とある井戸は、現在本堂の西にある井戸で、直径一メートル十センチ、深さ約六メートルの井戸のことであろう。(33・11・18)

史料 兵衆人名鑑 (二)

(三) 田村氏助

赤松 円谷

篠陽タクシ

電話五七番

田村氏助は、阿知使主(あちのおみ)の子孫で坂上田村麿の子という。故あつて桓武天皇の御代延暦年間京都より播磨国加東郡清水に移住して居たが、更に兵衆郡引原庄に来て此地方を開拓した人である。其子多門が刻んだ石碑高さ一米三十六寸のものが現在引原に残っている。

(四) 宇野 祐久

祐久は宇野日向守と称す。宇野越前守村頼(長水城主)の二男で、即ち宇野政頼の弟である。(註、篠の丸軍記には長水城主宇野政頼の二男に作つてある)祐久は玄瀬庄清野城主にして又、杉ヶ瀬舊居の領主であつた。この舊居は杉ヶ瀬氏の居城跡で「兵庫県兵衆郡誌」に「兵庫県兵衆郡千種村是」其他に伊和郷杉ヶ瀬城には宇野日向守祐久をして守らせたとある。天正八年長水合戦に羽柴秀吉と戦い、敗北して五月九日自害した。時に年五十七。日向大明神に祀らる。現在山崎町

神野地区清野城跡に日向神社がある。

(五) 稲岡阿丘(如水観)

歌人稲岡秋平の父にして通称は米屋次郎右衛門といひ、山崎町の犬冢寄をつとめた人望家で、俳諧をたしなみ、号を如水観と云い、又和歌をよくし阿丘と号した。「青藍集」に歌二首が掲載されており、俳句は山崎町(城下地区)段の観音堂の前庭に砦塚とよばれている句碑、三角形握飯型の自然石の表面に、「下りふね砦遠うなり近うなり如水観」とほつてある。

文化五戊辰年(西暦一八〇八)九月二十五日病歿して声蒼白通無染居士と諡され山崎町上寺大雲寺に葬らる。

旧藩邸の写生画

堀 口 春 夫

安政年間(一八二四—一八三〇)に書かれたらしい旧山崎藩邸の写生画が手に入ったので紹介します。「山崎藩御陣屋刃々之図」遠藤源助之画と表書きされた長方形の封筒様の中に九枚の彩色画があり、どれも実地を見ながら画いたらしく、今の写生画といふべきものである。画は

- 一、山崎藩表御門
- 一、玄関(紙屋御門より望む)
- 一、大広間

一、御殿中庭廻廊

一、角やぐら附近(東北隅)

一、桜の馬場(城下方面より望む)

一、内濠附近

一、表御門附近

一、小野源太夫屋敷正面

の九枚であり、美濃版和紙一ぱいに書かれている。遠藤源助は御書院詰であり、画は好きで中々素人ばなれがして、又山他の画も書いておられた。しかし割に若死されたと聞いていいる。うちの祖母が、遠藤家から承っている関係で、現在和歌山市に居住している遠藤一氏から、二人なものがあると聞かされ、それは山崎にあるべきものだから是非にと頼って入手したもので、同時に旧藩邸の鳥瞰図に家中屋敷を書き込んだ図面——榎井守城、山下利英の署名あり、源助の写したもの——と延宝八年、宝暦七年の山崎藩の武鑑写二枚がついていた。

ともかく現存の古本でも一寸記憶にない藩邸に關する珍しい画であるので、郷土研究家の御参考にして頂ければ本望です。

次に宝暦七年(一七五七年)の武鑑写を記しておきます。

本多大和守忠堯

御内室相良志摩守頼峰妹

子寅干申六月参府

戌参府 亥御飯

上屋敷はま丁へ大手より十五丁へ

下屋敷 本所林了

小野凶書 横井車太

武向清左卫門 馬場東馬

内藤兵馬 名嶋蔵太

用人 吉田武兵衛

御城使 吉住伝次郎

蒼龍稻荷神社靈驗記

春 名 荒 太 郎

本多忠隣公時代の物語りであります。忠隣公の若君の慰みにとて邸内の泉水に、雌雄二羽の鷲が飼養してありました。或日雄一羽の姿が見えませんでしたので若君が淋しがられ父上に其由を告げられました。忠隣公は恒例の通り早朝蒼竜神社へ現在南斎神社境内安置へに参拜せられていたので、その際神社を邸内に安置してあるのは何の爲であるかと大変立腹のあまり小言を言上されました。然る所翌早朝宿直の士が城内異状なきか

お嫁入道具

青柳タンス店

本町角(電二二)

と巡視しましたる際、神社の前に茶褐色の手釜し古狐が死体となつて横たわつて見付けた。早速公に報告しましたので、忠隣公も社前に此実物を御覽になつて大変驚かれ、神前に進まれて昨日の小言を只管詫びられた事が城内の評判となり、われもく〜と社前に集り、古狐の死体を見物する人で賑いました。私の一人の叔母は小向使として出仕してましたので其の群集の中の一人でありました。

教信上人の墓と千草念佛の由来

(宝篋印塔)

赤松 円珠

山崎町より千種村へ、千草の町に入つて百米余へ約一丁へ右側の路傍、千種村黒土宇中島の田に教信上人の墓所があります。石垣を以つて高さ一米八十余厘へ

一向横三米六十余程（二向）縦五米四十余程（三向）の高所を設け、その上に四階段の台石に上人の石碑が立っています。これは高さ一米余の宝篋印塔で足利時代末期のつくりと思われる。この地は教信上人示寂の靈地として伝えられています。

上人は藤原鎌足十三代の末裔、幼少にして仏門に入り、奈良の法相宗本山興福寺に於て学を修め大学者となられました。大同元年（八〇六）二十六才の時、唯識因明学の奥儀を究め、南都仏教界の一大明星と仰がれた。承和三年（八三六）五十六才の時奈良を出でて諸国を巡歴し遂に鶴を播州加古郡野口村に留め、庵（教信寺）を創立し念仏三昧に入られた。加古帯杖中に往來の旅人の荷物を背負うて人の辛苦を助けられつゝ播路一帯を念仏教化されました。故に時の人は呼んで阿弥陀丸と称したという。

貞観八年（八六六）の秋八月、一人の旅人が作州方面への案内を乞うたので、いつもの如く教化しつゝ、これを送られその帰途千草の平田というところで病発し十五日の夜半八十六才で入寂されました。

長津（或は作る播州）勝尾寺の勝如上人は、教信上人が千草に入寂された夢を見られ、弟子の勝監（或いは勝監）を播州加古の人々と共に、千草に遣わしてみると果してその如くであつたから加古の人々は教信上

呉服京染

キシダヤ呉服店

東和通 電五二五

人の庵に屍骸を引取ろうとしたところ、千草の道俗の人々は相議してこれを許さなかつたので遂に口論に及び、公事に訴え裁判となつた。その翌年貞観九年三月公吏の判決で、頭を加古に、骸を千草に葬ることになり、切断してその骸をこの墓所に埋葬したという。

伝えるところに、教信上人は剣難の相があつたので遂に屍となつて又を受け給うたといわれています。

斯くて千草の諸人は、教信上人を追善供養する道場を建て、公事判断の日を会式とすることにしました。

現在の千草町裏町の高台「千種村千草宇上谷にある浄土宗鎮西派「安国山教信院西蓮寺」は、明治維新の調書には、第五十六代清和天皇の御代、貞観八丙戌年教信上人の創立とあり、第一百十九代光格天皇の御代、天明年中の大火災で堂宇は焼失したが、それから六年の後（註）昭和三十三年より約百六十八年前）に再建したという現今の運物はこれがあります。

アサヒビール
スタンプド石油 特約店

三輪商店

東和通
電話 73

本尊は阿弥陀如來が安置されてあり、毎年旧曆三月九日より七日間、西蓮寺で教信上人念仏大法會が執行され、その十二日には「千草念仏」と称して教信上人の大徳を追慕し、千種村内は勿論、遠く村外からも参詣者が多く、堂に溢れ香花の絶えるときがない。

近年は、この日に稚子行列、仮装行列、千踊、生花会等を催し、また商人が来て盛んに物品を販売して、西蓮寺より千草町内は数千人の人出で、大変賑やかであります。

千草念仏会は、古来より千草最大の年中行事となっております。

また、加古川駅の西三十丁へ約三千二百七十余米の国道の北側、加古川市野口の遺蹟には、浄土宗教信寺が建っております。

実栗鉄の販路

宇野正 咲

千種鉄（実栗鉄）は、刀剣の材料としては非常に優秀なものであったが、それ以外の用途は何であつたらうか。乏しい史料ながらその一端を覗つてみる。

千種鉄は陸路山崎に運搬せられ、それより高瀬舟によつて楢保川川口の網干に送られ、更に遠く大阪にも送られたが、網干、成田屋に残る記録によると、大阪にまで運ばれたのは案外に少く、現在姫路市に輸入されている松原、妻鹿の地区に送られている。即ち

松原——大西屋、鑓屋、新屋、米由、島屋、決忠
松市

妻鹿——辰巳屋、勝向
飾磨——炭屋

の各向屋に入つて居た。これらの地区で一体何が作られたというかと、和釘に作られて、更に他地方に販売せられていた。

現在でも白浜は鉄工業（チエン）のさかんなところであるが、明治以後、和釘の衰退により、現在に転換したのである。

松原（白浜）、妻鹿の各向屋には盛衰があつたが、安政七年頃は最盛期で、炭屋、大西屋などが盛大で、遠く五島列島方面にまで船釘として売り出された模様で、大阪、江戸向もかなりあつた。

妻鹿、辰己屋が向屋を始めたのは、初代頼右エ門で文化四年に釘鍛冶工より向屋を初めているので、それ以前からも勿論行われていた事は想像出来るが、惜しいことに史料の據るべきものが現在では得られない。

郷土史料解説 (三)

安井 俊 二

実粟

実粟地方事務所編の週刊紙の大ききで、昭和二十七年七月一日発行、九八頁、事務所所長十周年記念事業の一つである。写真図版に特色があり、歴史、土地、人口、行財政、治安、産業経済、文化、土木、社会福祉、文化財等々十一章に別けて郡内各方面の資料を集め、最近の郡総合誌として完備したものである。クローズの厚い表紙をつけた特製と、仮とじの二種がある。

図表が多く収められ、歴史地図、地質図、地域図、地勢図等々中々参考となる図面が沢山あるので、郡に關心のある者は必見の書である。本書が横書きである

のも一つの特徴である。

実粟郡案内

大正六年十二月廿五日発行、編集発行人赤堀元泉で、発行所が実粟郡協賛会となつてゐるのは、同秋山崎町で開催された佐用、実粟、鉾、神崎、南及び木炭共進会記念のための刊行であることを物語っている。巻頭に西陛下はじめ、知事、郡長、県議、農会長等々、各代表者写真を掲載。書中随所に各官公署、神社仏閣、景勝地、各役場、村長、助役等の写真が半数の頁を取り、百十七頁であるが、記事よりも写真の時代性に興味がある。例えば、各役場とか各小学校写真など。

会員名簿 (三)

- (小茅野) 茅野 初子 (山崎) 三輪 克己
 (上野) 山岸清一郎 (五十波) 大部 彦吉
 (三方) 進藤正吾郎 (上牧谷) 中川 静收

化粧品
 化粧品

やばら屋

前バス姫神
 (TEL. 132)

本会雑報

關齊神社祭典

三十三年十月十七日午前十時より關齊神社に於て祭典執行。岸野副会長を初め役員及會員二十余名参列の上、根岸宮司の祝詞奏上あり、一同参拜式後中和堂にて近隣有志の好意を受け座談会を開き正午散会。

平尾孤城先生の記念講演

同日午後一時より山崎小学校講堂にて、小学校教育友会と本会と共催にて講演会を開催した。講師は現赤穂市商工会頭平尾孤城先生で、義士研究の第一人者として知られている方で、赤穂義士の秘録を平易に面白く講演せられ、耳新しき史実を知つて聴者一同に深き感激をあたえられた。午後五時終了。

本会役員会

三十四年一月二十六日町公民館に於て役員会を開会出席拾式名、左記の事項を取りきめた。

一、關齊屋敷内に鎮座の蒼魂稻荷社の祭典を本年六月初旬に行うこと

二、古老にものを聞く会合を本年四月中に企画すること

三、五月中旬本会主催にて島田先生の同行を乞い、東播地方見学貸切バス旅行を催すこと。

消息

岩上神社誌 大部彦吉氏著 A5版六八頁仮綴本で、祭神、由緒、財産等を明細に記述されている。

桓武伊和神社記 同人の著で、A5版四四頁で、内容は前著同様。

道素翁といろは訓へ歌 昭和三十三年十一月一日発行、友施会前野佐吉、安井寅一編集で、B6版三三頁、十一月二日歌碑建設記念に配布されたもので、歌碑写真、碑文等の外いろは歌の縮刷図が全部収められている。

歌集「悠冬」 昭和三十三年十二月発行、B6版、一三三頁、昭和十八年から最近までの三三〇首が三首組で収めてある。著者北林祐道氏は「水鏡」同人、発行所水鏡社、水鏡叢書二九編。巻末の一首は

今の一生をテストとしても本番にやはり中以上の自信はあらい

プロパンガス

本條商店

電 六五六
六五七